

ウイグル新体詩の詩人たち 5 人とその作品

- ・ アフメットジャン・オスマン (Ahmatjan Osman)
- ・ タヒル・ハムット (Tahir Hamut)
- ・ ペルハト・トルソン (Perhat Tursun)
- ・ グリニサ・イミン・ギェルハン (Gulnisa Imin Gulxan)
- ・ アブドレシット・アリ (Abdureshit Eli)

Ahmatjan Osman (アフメットジャン・オスマン)

1964年4月26日、東トルキスタン（ウイグル）のウルムチ市に生まれる。ウイグル現代詩の創設者、ウイグル現代文学を代表するもっとも著名な詩人。1978年、14歳の時に「おばあちゃんが教えてくれた物語」という題の処女作で詩人デビュー。ウルムチ市の有名な進学校の「実験中高校」を経て新疆大学文学部に入学後シリアのダマスカス大学に留学しアラビア文学で修士号を取る。現在家族とともにカナダのトロント在住。1980年に新疆ウイグル自治区第一回児童文学最優秀賞受賞。受賞作品名は「彼を学校に行かせて」。1992年にウイグルで行われた「読者が選ぶもっとも好きな詩人三人」の一人がアフメットジャン・オスマン氏。東トルキスタンが独立国だったらアフメットジャン・オスマンにとってノーベル文学賞も夢ではなかったとウイグル人の間で囁かれる人物でもある。ウイグル語とアラビア語で詩を書ける類い稀な才能の持ち主で、今まで11冊の詩集を（うち6冊はアラビア語で）出版している。英語に訳されたもの一冊『Uyghurland, the Farthest Exile』と本邦初訳の日語詩集二冊、2015年5月と11月に日本の歴史上初めて、ウイグル詩人の詩集としてアフメットジャン・オスマンの邦訳詩集『ああ、ウイグルの大地』『ウイグルの詩人アフメットジャン・オスマン選詩集』が出版された。2009年に東トルキスタン亡命政府に参加し、亡命政府の副総理を2015年まで務める。2015年11月2018年10月亡命政府大統領として勤めている。

何故一詩人から政治に関わるようになったのかという問題について彼は日本の産経新聞2016年10月15日インタビューで以下のように答えている。

<https://www.sankei.com/premium/news/161015/prm1610150024-n5.html>

産経新聞記者：「詩人」がどのような経緯でこのような運動に携わるようになったのか

アフメットジャン・オスマン：「私は今でも、詩人です。母国語で詩を書く、書きたい詩人です。私は詩を書いて、母国語で書いた詩が自分の故郷で出版禁止になるという現実と直面しました。私が愛して詩を書いた私の母国語は中国のバイリンガル教育という、実質的には漢語教育の下で、消滅の危機に晒されているのを目の当たりにしました。魚は水で生きているように、私たち詩人は言語、言葉の中に生きているものです。中国政権は私のような人間が呼吸している母国語をなくそうと政策を立て、一生懸命にそれを実行しています。私は自分の母国語を守ることは自分を守ることだとさとした詩人であるかもしれない。私は自分の母国語を守るために中国の政権、政策と戦わなければならない立場におかれました。母国語を守ることは私の祖国、侵略された大地を守ること。守るために独立を勝ちとらないといけないということに目覚めました。」

シェエラザードの口から次々に現れる夜

私は座り慣れた
とある公園の
濃い木陰の下で
一時（いつとき）昼を享受しながら
散歩している人々の顔に映る太陽を
アスファルトの間隙から芽吹く芝草を観ながら
シェエラザードの口から次々に現れる夜の到来で
起きている謀殺（ぼうさつ）の意味について考えていた
人生の暗い鏡から
私の運命を明らかにするために
私の許しを請うて
一人の占い師の女が前に立った
沈黙のうちに
彼女の狡猾な目を見つめ
ふと考え込んでしまったのだろう
気がつくと
シェエラザードの口から次々に現れる夜のように
足早に私から遠ざかっていった

歩みは
散歩中の人々の首に下げた鈴のように
かすかに響いていた
歩みは
アスファルトの隙間から出る
芽吹く芝草を祝うように
ほのかな光を浴びて輝いていた
その時から
私たちは昼を少しばかり享受しながら
次々に現れる夜から太陽を観ながら
輝く歩みで芝草を響かせ
公園で散歩するようになった
アッラーもサタンも知るすべのない人々の欲望を
あの占い師の女が占えるかどうか
知りたかった

2004年 アンカラ・トルコ

Tahir Hamut タヒル・ハムット

Tahir Hamut (タヒル・ハムット) 1969年カシュガルに生まれる。ウイグル若手詩人を代表するトップ詩人。北京の中央民族大学ウイグル学科を卒業後、北京党校の教師として働くが後にウルムチに戻り新疆芸術学院の準教授となる。「北京党校に務めた時の国家秘密を外国に流す疑いがある」との容疑で1998年～2001年まで三年間投獄される。2016年にアメリカに亡命。また同年、ウイグル詩人としては初めてアメリカで、彼の名詩「夏は一つの陰謀」の名に因んだ詩の夕べ「Summer is a Conspiracy」を開催した。『西欧現代文学概論』などの著書と『問と他』などの詩集がある。彼は、ウイグルの詩人としてはじめて、アメリカのベンス副大統領のマイク・ポンペオ国務長官と会い（2018年7月。ワシントン）、ウイグルの文化人の現状を訴えた詩人でもある。アメリカに渡った同時はタクシーの運転士をして生計を立てていた。今はラジオ・フリー・アジアの記者として働いている。

2019年10月にメキシコの映画監督のNoe Navaによる、タヒル・ハムットの人生を描いた「フェアファックスに生きるウイグルの詩人」が収録された。このドキュメント映画の

中でタヒルは「ウイグルの豊富な民間文学が小さい時から私に多大な影響を与え、育てくれたおかげで、私は詩人になった」と述べている。

<https://m.youtube.com/watch?feature=share&v=MsBdkpi9ZBQ>

ウルムチ

町は
死せる氷の中
古の凍てつく風が
尊厳を吹き飛ばしていた
水面に映った星影が
ずぶ濡れになった
地面から蒸気が立ち昇っている場所で
真昼の一時 私は啜り泣きを耳にした

町は
繰り返される乱れた物語
主人公になれない私
幾年も前の太陽の光が煌めく夏の日
愛への恐怖を抱いた病んだ娘が
愛しているというウイグル語が分らぬまま
町から立ち去った

町は
疲れきっていた 私のように
春と秋を拒んだ
霧の中で遠のいていった

2007年3月 ウルムチ

Perhat Tursun ペルハト・トルソン

ウイグルのトップ詩人で小説家の一人。1969年、南部の町アトシに生まれる。1980年文壇デビュー。中民族大学ウイグル学科卒。文学博士。文化庁の職員。『ペルハト・トルソ
ン選詩集』などの詩集と『自殺の芸術』などの小説がある。ウイグル語と中国語で詩と小説を書く。2018年に強制収容所に送られ、実刑が渡された。

<http://turkistantimes.com/m/news-3563.html>

宿敵

宿敵同士の二人

互いに反対方向に歩き続ける

ある日

同じ地点に辿りつくことになる

地球は丸い故

暗闇に向かう者は振り返らない

光を目指す者も前進のみ

ある日

同じ時点にいることになる

歴史は繰り返す故

Gulnisa Imin Gulxan グリニサ・イミン・ギェルハン

ウイグルを代表する実力派の女流詩人の一人。1976年、ホータン市に生まれる。中学校教師。『ギェルハン』『ギェルハンより101夜』などの詩集がある。2018年に所謂「再教育センター」と言う強制収容所に連れていかれて、今は行方がわからない状態である。

父の麦畑と兄のホータン玉

如月の頃

父の麦が熟し

杏が地に落ちた

それを見ながら

気づかれずに通る時を見ながら

七人の心が締めつけられた

咲き誇るタマリスクの樹が

父のように曲がった
父に逢えなくなって頭が下がった
父がそれらに逢いたくなくなったように
彼らも父に逢いたくなくなった
父の額に輝く汗水を
太陽 微風 大地が
時に思い出した
幾夜か過ぎた
小川が父を思い出した
父のしっかりした足音が
何故か時間と共に遠ざかって行った
幾ばくかの肉を
孤児のくるみに包んで帽子に入れた
七人の父がくたびれた

父の桑の実が熟した
雀と鶯が腹いっぱい食べた
杏が熟した
雀とネズミが腹いっぱい食べた
小麦が熟した
陽射しが腹いっぱい食べた
父の命が熟した
私たち七人の雀は未だ腹いっぱいできなかった

父は小麦に問う
鎌を研ぐ
月明かりの下 畑に行く
驚いて気づいた時には
自身で立ちあがれなくなっていた
小麦の面倒をみられなくなったことを
桑の実を振り落とせなくなったことを
杏を陽射しに見せられなくなったことを
無言で悲しむ
心に染み入る
父の麦畑は
惜しみながら父に逢いたがる

父が植えた胡桃の樹は大きくなった
葡萄畑が広がった
梨の木は果樹園になり
タマリスクも一人前に育った
胡楊の木は父を待ちわびた
父の手は届かなくなった
足跡が辿りつけなくなった
それでも忘れることがなかった

父の麦が熟した
私たちが刈った
それでも父の疲労は癒えなかった
鎌を握り慣れた手が
私たちの頭を撫でた
響く音を懐かしむ声に
泣きたくなる
何も言わないが
父の沈黙が私たちに悲しみに陥れる

父の麦が熟した
父に逢いたくなりながら
この何年も熟したまえ
父は腰を曲げて狩ることができなくても
小麦のような心が退屈にはなるまい

兄のホータン玉が
川辺で静かに眠る
玉は
ヨルンカッシュ河の身体
兄は痺れた 疲れた手で
希望を掘る
命を掘る
家にいる女子供の
待ちくたびれた期待を掘る
掌の石が
恥じらいつつ静かに彼を見つめる

恥らいは今月から来月まで待てない
幸運が訪れようとする時
兄の手足が麻痺してしまう
石はそのまま大きくなってくれない
兄は湿った砂に座して
掌を広げる

兄は父の麦が熟して欲しいと願う
目に涙が浮かぶ
父は兄の玉が大きくなって欲しいと願う
懐が愛と優しさでぼろぼろになりながら

Abdureshit Eli アブドレシット・アリ

ウイグルを代表する若手詩人の一人。1974年ホータン市に生まれ、1992年に詩人としてデビューする。600篇以上の詩を書いてネットで発表している中学校の教師として有名。彼の詩は中央アジアやトルコ、中東などで根強い人気がある。2年前から連絡が取れていない。

愛は嘘から始まる

愛は嘘から始まる
いつしか想像を超えた真実が変わる
恋人に捨てられた時 全てが嘘のままであって欲しい
恋人が戻ることだけが嘘として残る

私は嘘について考え始める
隣の娘が私の前を通り過ぎる
残り香が
命を取るほどに地面に散らばる
私は嘘が真実になる道筋を考え始める
歩きながら君の方を繁く振り向く
君は真向いの道を歩いている
人々の中に君を見失う
何故かと自責の念にかられる

やがて得心がゆく
人々が君を隠してしまう
君を見ることができない
太陽は君が去ったと言ひ
天空から地面まで
全てが嘘であることを望んでいる
窓が開いているのが 見えるか
幸が欠けているが 見えるか
私の生きざまが 見えるか
私の身に魂がないが 見えるか
隣の娘が再び過ぎて行く
残り香はなく
私たちが別れたあの角は
誰かを巡り合わせ 誰かを別れさせる

私は去ったが 君のようには去れない
私は生きたが 君のようには生きられない
私は忍耐強いが 君のようには忍耐強くない
私は諦めたが 君のように諦めない
嘘から始まったことばかりを考えてはいられない
始めは信じられなかった真実を思い出せない
君を待っていることだけを覚えている
残りは嘘ばかり

愛が一本の薔薇であるのなら 自身で受け取って
愛が一つの物語であるのなら 語るのを止めて
あの日は この日と繋がり
私は自身に戻っても不思議であるまい
小さなできことが重なる夜

こちらで紹介させていただいた詩は 『ああ、ウイグルの大地』 『ウイグルの詩人アフ
メットジャン・オスマン選詩集』 『ウイグル新鋭詩人選詩集』 (ムカイダイス・河合眞共
訳 左右社出版) からの抜粋である。

